

〈公募論文〉

## 「第四誤謬推理」における懐疑論批判について

福地 信哉

### 序

『純粹理性批判』A版の「第4誤謬推理」(A366-380)は、難解で錯綜しているばかりでなく、結局のところ対象を心的存在者と同一視する現象主義的見解に深くコミットしているようにも見えるがゆえに冷遇されてきた。それは観念論論駁関係の彼の議論に批判的な者にとって恰好の標的となってきたし<sup>1</sup>、また彼の成熟した議論を評価する向きからも、B版以降への踏み台として軽視されがちであった<sup>2</sup>。しかしそこでの議論は[Stroud 1984, 128-169]によって、外的知識の懐疑論批判という明快な文脈の内に位置付けられた。本発表でもストラウドに倣って「第4誤謬推理」の標的を外的知識の懐疑論、とりわけ外的対象が存在するという知識についての懐疑論として理解する。とはいえストラウドによれば超越論的観念論という不明確にして不当に現象主義的な見解のゆえ、カントの議論が成功しているとは到底言えない<sup>3</sup>。

本稿はそこで、ストラウドに従い「第4誤謬推理」を知識の懐疑論の批判として理解しつつも、彼に抗してそこから擁護可能な議論を析出することを目標としたい。その擁護可能な議論は、主体が対象の存在を知っているための条件を捉え直すもの、一言でいえば知識概念を転換するものであるということが明らかになるだろう。

手始めにいくつか用語上の注意しておく。本稿が懐疑論を批判するということで意味するのは、懐疑論の源泉となっている前提を的確に押さえ、その前提を採用することが必ずしも強制されていない次第を示すことである。これは、どのような反論が来ようとも懐疑論に固執する論者を救う手立てにはならないだろうし、また自己論駁に陥っていると判明しない限り転向しないと決めている者にも効き目がないだろう<sup>4</sup>。しかしそれでも、後に見るような懐疑論の強制力を持った見かけを除去し、彼に別の道を示すことができるのは十分な進展となる。

本稿が知覚、知覚経験、あるいは単に経験と呼ぶのは、五感を通じた対象の認知の一種である<sup>5</sup>。知覚の対象とは、時空内に局在する個物のことである。また、知覚は真であったり偽であ

1 例えば[Kemp Smith 2003, 304-305]、[Turbayne 1955]らを参照。

2 例えば[Guyer 1987, 280-282]を参照。

3 [Stroud 1984, 159-169]を参照。

4 懐疑論者を自己論駁に落とし込むという方針はむしろB版の「観念論論駁」で採用されたものである。だが、A版「第4誤謬推理」を軽視することはこのことから直ちに動機付けられはしない。自己論駁の議論は成功すれば確かに批判としてはより強力な手立てではあるが、「観念論論駁」での議論が残念ながら問題含みであることは指摘されているからである。例えば[Chignell 2010]を参照。

5 演繹論で述べられるように、カントによれば知覚はカテゴリーの適用を含む(B161)。知覚はさらにある

ったりするものであり、真である時にはそれは真正な(veridical)知覚と呼ばれる。知覚の哲学の現代文献では、知覚という語の指示を真正なそれに限ることが多いが、それとは異なった用法であることに注意されたい。さらに、本稿が問題にする偽なる知覚は、幻覚(hallucination)に限られる。これは、何かを真正に知覚しているように主体には思われるが、実際には知覚されているものが何もない状況のことである<sup>6</sup>。

以降、本稿の課題は、カントが標的としている懐疑論の理路を再構成すること(第1節)、そしてカント的な懐疑論批判を擁護可能なものとして提示することである(第2節)。

## 1 対象の存在知の懐疑論

本節では、標的となる懐疑論の理路を再構成する。懐疑論者の説くところを引証しておこう。

その現存在へと、与えられた諸知覚に対する原因としてのみ推論されうるようなものは、ただ**疑わしい現実存在**を有するにすぎない。[...] /ところであらゆる外的現象は、その現存在が直接に知覚されうる種類のものではなく、その現存在へと与えられた諸知覚の原因としてのみ推論されうる種類のものである。[...] /それゆえ、外官の全ての対象の現存在は疑わしい。(A367)

ここでの主張は、直接的には、外的対象は存在しないかもしれないという存在論的主張として読める<sup>7</sup>。しかし本稿では[Stroud 1984, 128-169]の線に従い、これをむしろ私たちが外的対象の存在を知ることは不可能であるとする認識論的主張として理解する<sup>8</sup>。そして、以下で懐疑論者の議論を次のように読むことにしたい。後論のため大前提と小前提の順番を入れ替えてまとめておく。まず、主体sが知覚経験eの対象oの存在を知っているのは、「eが性質Fを持っているがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる場合に限られる(小前提)。これを「推論テーゼ」と呼ぼう。次に、真正の知覚とある種の幻覚はその性質において識別不可能であり、前者を後者から区別する当該の性質Fは見出されないため、そうした推論を行うことはできない(大前提)。こちらを「不可識別性テーゼ」と呼ぶ。推論テーゼと不可識別性テーゼから、sはoの存在を知ることができない、と結論される。この理路を、段階を分けて追跡することにしよう。

### 1.1 推論テーゼ——原因テーゼに動機づけられることによる

推論テーゼから検討しよう。これを採用する動機は何だろうか。それは、真正の知覚の対象が

---

種の仕方では経験的概念の適用をも含むと解されうるが、ここでは立ち入らない。この件については[福地 forthcoming]で一定程度論じた。

6 本段落の整理には[Fish 2010, 3]を参照した。

7 [Strawson 1966, 258]を参照。

8 「知る」および「知識」という語は本稿を通じて、カントの語彙における「認識する(erkennen)」および「認識(Erkenntnis)」の一種であることを意図して用いられる。ただし、その正確な位置付けについてはさらなる検討を要する。

知覚の適切な原因であるという点にあると思われる。真正の知覚の対象は、第1近似として、その知覚を成り立たせている因果連鎖の適切な位置を占める原因であると言えるだろう<sup>9</sup>。これを「原因テーゼ」と呼ぶことにしよう。懐疑論者は原因テーゼに動機づけられて推論テーゼを採用する。つまり、sがoの存在を知っているのは、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる場合に限られる、と考えることになる。これが1.1節の筋書きである。

原因テーゼを説明しよう。目の前のこの机を正しく知覚しているということを例に採って検討してみたい。この真正な知覚に関わる因果的過程は次のように記述されるだろう。発電所が電力を生み出し、それによって部屋が照明され、その光がこの机に反射し、「この光はほぼ直線的に眼まで進み、[...]網膜上に像を作る。網膜細胞が刺激され[...]刺激は信号となり[...]、最終的に脳細胞における刺激パターンとなる。このパターンは主体の経験であるか、あるいは経験を引き起こすものである。」([Lewis 1980, 242])と。見て取られるように、真正の知覚の対象すなわち机は、その知覚の原因となっている。これは科学的な記述であるが、知覚されている机が、知覚の原因であるということは、例えば視線を固定したままこの机が動かされるとこの机が見えなくなるといった相関についての経験によっても理解されることだろう。

より精確には、真正の知覚の対象は、その知覚を成り立たせている因果連鎖の適切な位置にある原因であると限定する必要がある。上の因果連鎖の記述から分かるように、部屋を照明する電力を生み出す発電所の状態や、脳や目の状態もまた、当の知覚の原因である<sup>10</sup>。しかしそれは知覚の対象すなわち机ではない。それゆえ、真正な知覚の対象を同定するには、発電所の状態や脳や目の状態といった、因果連鎖のあまりにも遠方や近傍にあるものを排除する限定を加える必要がある。「因果連鎖の適切な位置にある」という規定は曖昧さを残しているが、それを洗練させることはここでの目的ではない。ここでは、真正の知覚の対象とはその知覚を成り立たせている因果連鎖の適切な位置を占める原因であるという原因テーゼが、第1近似としてもっともらしいという点について同意が得られさえすればよい。以下、こうした原因を単に「適切な原因」と略称する。

懐疑論者は、ここからさらに推論テーゼへと進む。再掲しておこう。

[...]あらゆる外的現象は、[...]その現存在へと与えられた諸知覚の原因としてのみ推論される種類のものである。(A367、傍点引用者)

既にこれを次のように解しておいた。sがoの存在を知っているのは、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる場合に限られる、と。

例えばsは「あなたはなぜ机の存在を知っていると言えるのか」という問いかけに対して、次のような推論によって応答できる必要がある。「私には机が見えている。この知覚経験は、光が十分に当たっており、私が一定時間机を見ており、アルコール中毒でもない...といった条件下でなされている。それゆえこの知覚経験の適切な原因、つまりこの机は存在する」、と。注意しておきたい。推論テーゼがsに課している制約は、例えばsが机を見ながらこうした推論プロセスを

9 この線の近似としては例えば[Strawson 2008b, 78ff.]を参照。

10 [Fish 2010, 115]を参照。

意識している必要があるといったことではない。その対象が存在するという理由を尋ねられれば、sが上のような推論によって応答できるということ、これで十分である。

重要なのは、こうした推論を行うためには、真正の知覚を幻覚から区別する性質Fに訴える必要があるということである。懐疑論者は続いて、真正の知覚とある種の幻覚はその性質において識別不可能であり、前者を後者から区別する性質Fは見出されないと主張する。これが不可識別性テーゼである。

## 1.2 不可識別性テーゼ

不可識別性テーゼは、典型的には次のように懐疑論的シナリオを用いて導入される<sup>11</sup>。そのシナリオは、私たちの知覚経験の系列はそのままに、当の諸経験の適切な原因が総じて存在しないという点で常識的描像に変更の加えられたものである。私たちの知覚経験の一切は、当の対象によってではなく、デカルトの言う悪霊によってもたらされたものかもしれない。あるいは私たちは水槽の中の脳(以下「水槽脳」)であり、私たちが外的知覚を行う際と同様の電気刺激がそれに接続されたコンピュータから送り込まれているのかもしれない<sup>12</sup>。私たちの知覚は実際に知覚の適切な原因によって引き起こされたのではない虚構の産物、カントの用語で言えば「私たちの内官の単なる戯れ」(A168)かもしれない。そしてここでのポイントは、その適切な原因が存在するような常識的シナリオにおける経験と、それが存在しないような懐疑論的シナリオにおける経験とが質的に識別不可能であるという点にある。

前節と合わせてまとめよう。懐疑論者の議論はこうである。sがoの存在を知っているのは、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる場合に限られる(推論テーゼ)。ところで、真正の知覚とある種の幻覚はその性質において識別不可能であり、前者を後者から区別する当該の性質Fは見出されなため、そうした推論を行うことはできない(不可識別性テーゼ)。それゆえ、sはoが存在するということを知りえない。

注意していただきたい。懐疑論者が述べているのは、単に、仮に私たちが水槽脳であるとしてその場合に私たちが対象の存在知を有していない、ということに留まらない。彼の主張はより破壊的である。主張は、私たちが常識的シナリオに属していようが、水槽脳であろうが、そして何らかの理由により水槽の外の世界へと目覚めるといふ状況になろうとも、いかなる状況でも私たちが対象の存在の知識を持つことは決してないというものである。その理由は、推論という、対象の存在を知るための唯一のルートが閉ざされていることにある。次節ではカントがこうした事態にどう対処したかを見ることにしよう。

## 2 カント的な懐疑論批判

本節では、カント的な懐疑論批判をその擁護可能なものとして析出することを試みる。カントのアプローチは2種類に区別される。1つ目は問題含みだが、2つ目は成功していると論じた

11 例えば[Fish 2010, 108]を参照。

12 この記述には[McKinsey 2018, Section 1]を参照した。

い。カントの第1の方針は、不可識別性テーゼを拒否し、存在知の現実性を主張するものである。まずカントは、懐疑論の誤謬の根を、対象とはその存在が原理的に言って私たちに知られない「物自体」であると想定したことに認定し、これを拒否する(超越論的観念論の第1段階)。さらにカントは不可識別性テーゼに反して、むしろ真正の知覚経験は前後の経験との整合性によって、幻覚経験から区別されると考える。これは、対象とはその存在が原理的に言って私たちに知られている「表象」である、という考えに依拠している(超越論的観念論の第2段階)。しかしこれは対象を過剰に心に内部化することであり、その結果懐疑論批判としては成功しない。

第2の方針は、推論テーゼを拒否し、存在知の可能性を主張するものである。すなわち、sがoの存在を知っているために、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる必要はない。私たちは多くの場合に知覚の対象の存在を知っていることができ、その際推論によってそう結論できることは要求されない。このように知識概念を転換することこそが「第4誤謬推理」から分出される擁護可能な議論の方針である。順に見てゆくことにしよう。

## 2.1 第1の方針——不可識別性テーゼの拒否

懐疑論の源泉をカントは次の点に突き止める。すなわち、知覚の対象が存在したりしなかったりする領域を、私たちの認知の受容的能力(感性)によってアクセス不可能な領域としてしまったことである。知覚の対象の存在を私たちが知っていることが原理的にありえないというのは確におかしい。実際に知覚の適切な原因oが存在しており、またその他の適当な条件が満たされているならば、私たちはoの存在を知っている。私たちが実際に知っているかどうかはともかくとして、知っているということがそもそも不可能であるというのはもっともらしくない。

カントの説明を聞こう。まずカントは、原因の知識の不可能性という考えの所以を、当の原因が私たちの受容的能力によってアクセスされえない、受容的能力を離れた領域にあるということに認定している<sup>13</sup>。

[...] 表象の非感性的原因は、私たちには全く知られておらず、その原因を、私たちはそれゆえ客観として直観することはできない。というのも、そうした対象は、(感性的表象の単なる条件である)空間内でも時間内でも表象されるはずがないからである。(A494/B522)

次にカントは、こうした受容的能力によってアクセス不可能な領域に知覚の対象を措定することを、懐疑論の誤謬の根として論定している。

私たちが外的対象を物自体とみなしておくなら、どのようにして私たちが自分の外部にある対象の現実性の認識へと至るべきかは、端的に把握不可能となる。私たちはただ自分の内にある表象だけを拠り所としているからである。(A378)

懐疑論者は、知覚の対象が存在したりしなかったりする領域を、受容的能力によってアクセス不

13 知覚の対象の存在の不可知性という懐疑論的考えと、カントにおける物自体の不可知性という考えとを紐づけることは、[Nitzan 2012, 173-175]や[Marshall 2019, 85-86]によってなされている。

可能な領域としてしまう。その結果、oが存在すると推論することはいかなる状況でもできないことになる。

しかし私たちはそのような不可知な原因が知覚の対象であるとは思っていないだろう。私たちは、知覚されるべき機が、原理的にその存在の知りえないものであるとは考えていない。原理的にその存在が不可知な机なるものを、私たちは問題にしてはいない。引照しよう。

超越論的对象とは、[...] 未知のものである。超越論的对象についてはしかし問題ではなく、むしろ問題なのは経験的对象なのである。(A372-373)

原因テーゼから不可識別性テーゼへの移行はブロックされるべきである。真正の知覚の対象が知覚の適切な原因であるという原因テーゼが認められるのは、その知覚の対象の存在を知っていることが私たちにとって原理的に不可能なわけではない限りである<sup>14</sup>。知覚の対象とは、その存在を知っているという事態が原理的に不可能なものではない。知覚の対象とはそうした「物自体」ではなく「表象」である。これが超越論的観念論の第1段階である。

[...]これ[超越論的観念論]に従うと私たちは現象をことごとく単なる表象とみなし、物自体そのものとはみなさないことになる。(A369)

このステップはもっともらしい。カントはしかし、表象の特徴付けにおいてさらに第2段階を踏む<sup>15</sup>。以下で、これは勇み足であり、第2段階へと進むことに基づく懐疑論批判は成功しないと論じたい。

知覚の対象が表象であるとはどういうことか。カントが意図していると思われる見解では、対象とは、その存在を私たちが知っているということがそもそも決まっているものである。ただし、対象が存在するとみなされるのは、その対象の経験が前後の経験と整合的関係に立つ場合である。

さて、[...] 誤った仮象から逃れるために、ひとは次の規則に従う。すなわち「経験的諸法則にしたがって知覚と関連するものが、現実的である」ということである。(A376)

カントによれば、経験の整合性という基準によって、真正の知覚経験を幻覚経験から識別することができる<sup>16</sup>。

しかしこれは懐疑論への応答としては不適切である。仮に、私たちは前後の経験との整合性によって、ある経験の対象が存在していると判定しているのだと認めてみよう。それでもなお、そのようにして整合的な部分とそれと調和しない部分とが区別された経験系列は、総体として、水槽の持つ幻覚経験の系列と区別の付かないものである。まさにこれが不可識別性テーゼの論点

14 カントが原因テーゼを認めていることは、例えばB72の文言から窺われる。

15 ここでの第1段階と第2段階の区別がカントによって自覚されていたという見解に本稿はコミットしていない。両段階が論理的に独立であり、解釈上も区別できるというのがここでの主張である。

16 [Nitzan 2012, 167-173]、[Caranti 2007, 97-100]、[Abela 2002, 193-199]を参照。また、『プロレゴメナ』の文言(IV, 290)も参照。

であった。他方カントの整合説的基準によれば、私たちが常識的シナリオに従っている場合でも、懐疑論的シナリオに従っている場合でも、そのいずれの経験系列の内部でも整合性が存在する以上、私たちは対象の存在を知っているということになってしまう。仮に私たちが水槽脳であるとしても私たちは机が存在すると「知って」いることになる。しかしそうだとすれば結局、私たちの知識は本来の世界についての知識ではないと言わざるを得ない。次のようなストラウドの否定的裁定は、カントの立場が上のように解される限り正しいだろう。

[...]こうした[カントの]説明は満足ゆくものではないように私には思える。こうした説明は、依然として「私に依存していると私が理解している事柄に、私の知識は限定されている」と述べているのである。[Stroud 1984, 166]

周辺的知覚と整合的な知覚の対象の存在を私たちが知っているということがそもそも決定しているのだとするのは、対象理解の過剰な反動の結果である。超越論的観念論の第1段階、すなわち対象とはその存在が原理的に言って私たちに知られていない「物自体」ではない、ということは全く正しい。これはカントの洞察である。しかしその第2段階、すなわち対象とはその存在が原理的に言って私たちに知られている「表象」である、ということは行き過ぎである。第1段階は第2段階を含意しない。なぜなら、対象の存在を私たちが知っていないと原理的に決定することができず、かつその存在を私たちが知っているとも原理的に決定することができないというオプションが考えられるからである。さらに言えば、ここに姿を現しているのは単なる論理的空隙ではなく、極めてもっともらしいオプションである。一方で、私たちは実際に常識的シナリオに属しているのかもしれない。この場合私たちはこの机が存在すると知っている。他方、私たちは懐疑論的シナリオに属しているのかもしれない。その場合私たちはこの机が存在すると知ってはいない。私たちはこの机が存在すると知っているかもしれない。あるいはそう知らないかもしれないのである。こうした不確定性を許さずに、対象の存在を私たちが知りえないと決定することも、あるいはその存在を私たちが知っているとして決定することも誤っている。対象の存在を知っているということを排除する懐疑論者も、知らないということを拒絶する現象主義的カントも誤っている。

カントは結局不可識別性テーゼを拒否できていない。彼の整合説的基準がもっともらしくないゆえ、依然としてeが真正のものであることを示す性質Fは見出されていないのである。

とはいえ、既存の大方の解釈に反して、これは「第4誤謬推理」の議論全体を拒否する理由にはならない。存在知の不可能性を主張する懐疑論を批判するためには、もう一つの前提、すなわち推論テーゼを拒否しさえすればよい。実際そこにこそ、「第4誤謬推理」から引き出される擁護可能な議論が存在する。

## 2.2 第2の方針——推論テーゼの拒否

私たちは今、真正の知覚の対象が知覚の適切な原因であるという原因テーゼを、当の対象の存在を知っていることが私たちにとって原理的に不可能なわけではないという条件付きで受け入れている。懐疑論者はここからさらに、sがoの存在を知っているのは、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」とsが推論できる場合に限られる、という推論テーゼに至る(1.1節)。しかしこの移行は正当化されているだろうか。なるほど、真正な知覚の対象は知覚の適切な原因

である。それは確かである。oが真正な知覚の対象であるのは、oが知覚の適切な原因である場合でありその場合に限られるということを仮に認めるとしよう<sup>17</sup>。しかしこの件と、oが真正な知覚の対象であると知っているためには、oが知覚の適切な原因であると推論できねばならないということは別の事柄である。また前者から後者への移行は正当化されていない。前者は事実の問題であり、後者は事実の知り方の問題である。アナロジーを用いて説明しよう。xが水であるのは、xがH<sub>2</sub>Oである場合でありその場合に限られる。しかし、だからといってレストランでテーブルの上に水が置かれていることを知っているために、水素と酸素の化合物がそこにあると知っている必要はないだろう。化学を学んでいない幼稚園児でも、そこに水があると知っている。そしてカントは同様に、知覚の対象が知覚の適切な原因であるからといって、知覚の対象が存在すると知っているために、知覚の適切な原因が存在すると推論できる必要がないと考えている。

その[現象としての物質の]現実性は推論される必要がなく、むしろ直接的に知覚されるのである。(A371)

sは、oの存在を知っているために、「eがFであるがゆえに、eの適切な原因oは存在する」と推論できる必要がない。どういうことだろうか。カントの説明を聞こう。

全ての外的知覚が、[...]空間内の現実的な或るものを直接的に証明する。(A375)

このようにカントが幾分誇張気味に述べている時、彼が回復しようとしているのは、私たちにあって日々親しい認知の在り方である。それは、存在しない対象を存在とする認知状態(幻覚)に陥ることが私たちに減多になく、よっぽどのことがない限り外的知覚の適切な原因は存在しているということである。私たちの認知能力は、対象が存在している時には存在していると、存在していない時には存在していないと認知するよう、多かれ少なかれ組織されている。存在していない時に存在しているとみなすのはむしろ逸脱的事例なのである。ほとんど全ての外的知覚の対象は知覚の原因として存在している。これがひとまず上の文言から読み出されるべきことである。引用を続けよう。

その[現象としての物質の]現実性は推論される必要がなく、むしろ直接的に知覚されるのである。(A371)

この一文はやはり超越論的観念論の現象主義的第2段階、すなわち対象とはその存在が原理的に言って私たちに知られている心の内部の表象であるという件に感染していると思われるかもしれない。しかしそう読む必要はない。論点は現象主義とは別にある。ポイントはむしろ私たちが対象の存在知を持っているための条件に関わっていると読むことができる。ここで言われているのは、推論テーゼに反して、対象が存在すると知っているために、どの前提からどのような推論に

---

17 これは知覚の対象という概念を知覚の原因という概念によってあくまで近似的に説明できるとする原因テーゼよりも一段強い主張であり、本稿が採用しているものでは必ずしもない。



よってその結論を引き出すに至ったのかということを示しうる必要が主体にはないということである。かえって、主体が対象の存在を知っているというのは(私たちが水槽脳でもない限り)デフォルトで認められることである<sup>18</sup>。机の存在の知識とは、「私はしかじかの知覚を有している」ということから何らかの手続きを経て「机が存在している」という結論に至ることを示しうることによって初めて認められるものではない。むしろそれは、私たちがこの机と適切な仕方で結びついているというまさにそのことによりデフォルトで有していることの可能なものなのである。より詳しく言えば、主体が「私には机が見えている。この知覚経験は、光が十分に当たっており、私が一定時間机を見ており、アルコール中毒でもない…といった条件下でなされている。それゆえこの知覚経験の適切な原因、つまりこの机は存在する」といった推論を開示できて初めて彼がこの机の存在を知っていることが可能になるのではない。むしろ彼は(水槽脳でもない限り)机の存在をデフォルトで知っているのである。カントは推論テーゼを拒否することによって、知識概念のこうした転換を行なっているのである<sup>19</sup>。

こうした知識概念は、対象の存在知についての私たちの理解に即したもっともらしいものである。幼児が「あそこに積み木がある」と言ったとしよう。彼に「君は積み木があると本当に知っているのだろうか。理由を挙げてもらえるかい」と尋ねる。彼が、例えば幻覚の生じがちな条件を排除できないがゆえに言葉に窮したからといって「では君はあそこに積み木があると知ってはいないのだ」と断定するだろうか。そうではないだろう。対象の存在の知識とはむしろ、多くの概念を習得しているわけでも複雑な正当化の活動をできるわけでもない未成熟な主体であっても持つことのできる、他愛もない知識のはずである。カントの主張はこうして、私たちの認知において存在知は標準的でむしろ幻覚の方が逸脱的事例であり、また未成熟な主体であっても存在知を持ちうるという直感に適ったものである。これに訴えて推論テーゼを拒否することが、「第4誤謬推理」から私たちの学びうる擁護可能な議論である。

18 ここでの言葉遣いは[Williams 1999, 51-52]のものを借りたが、論点が同じであることは意図されていない。

19 ありうべき誤解を除去しておきたい。本稿の主張は次のようなものではない。超越論的観念論の立場によれば私たちが水槽脳である可能性を否定できないが、代案ではそれができると。むしろ、本稿の主張はこうである。私たちが水槽脳である可能性を超越論的観念論によって否定しようとする第1の方針は、知識の可能性を主張するための戦略として悪手である。かえって、知識とは水槽脳の想定を推論によって否定することなしにも成り立ちうるのだという考えを提出する第2の方針こそが有力な戦略である、と。

この第2の方針に関連する今後の課題を述べておきたい。本稿が採用している立場では、主体が対象の存在命題 $p$ を知っているための或る必要条件 $\phi$ について、次のことが成り立つ。それは、 $\phi$ が成り立っているということを推論によって示せなくとも主体が $p$ と知っていることが可能であるということである。私たちが水槽脳でなく実際に世界と結びついているということはそうした $\phi$ の例となる。しかしこれに対して、そうした $\phi$ は存在しない、いやしくも $p$ と知っているためには、その必要条件が総じて成り立っていることを私たちは知っていなければならない、というように思われるかもしれない。ここに現れている対立は現代認識論における外在主義と内在主義の対立に重なることになる([Bird & Pettigrew 2019, 3]の特徴づけを参照)。本稿の立場は外在主義に、想定反論者の立場は内在主義に親和的である。この対立と懐疑論批判の関係を明らかにすることは、極めて重要かつ巨大な問題でありここで立ち入ることはできない。また、本稿で提出された外在主義に親和的な「第4誤謬推理」の知識概念が、『純粹理性批判』全体の知識概念とどう関係するかということについても今後の課題としたい。

## 結論と展望

以上の成果をまとめよう。課題は、カントが標的としている懐疑論の理路を再構成すること、そしてカント的懐疑論批判をその擁護可能なものとして析出することであった。

第1節では、懐疑論の理路を再構成した。当該の懐疑論は、外的対象の存在知の不可能性を主張するものである。懐疑論者は、推論テーゼと不可識別性テーゼから、私たちは知覚の対象の存在を推論できず、それを知ることが不可能であると結論する。

第2節では、カント的な懐疑論批判をその擁護可能なものとして分出することを試みた。カントの第1の方針は、不可識別性テーゼを拒否し、存在知の現実性を主張するものである。しかしこれは対象を過剰に心に内部化することであり、その結果懐疑論批判としては成功しない。

第2の方針は、推論テーゼを拒否し、存在知の可能性を主張するものである。私たちは多くの場合に知覚の対象の存在を知っていることができ、その際推論によってそう結論できることは要求されない。これは、私たちの認知において存在知は標準的でむしろ幻覚の方が逸脱的事例であり、また未成熟な主体であっても存在知を持ちうるという直感を捉えたものであった。このように対象の存在についての知識概念を転換することこそが、「第4 誤謬推理」から引き出される擁護可能な懐疑論批判の戦略である。

最後に以上によって開けてくる展望に言及しておきたい。知覚の対象が単なる表象であるという超越論的観念論の主張は、対象とはその存在知がそもそも現実的であるようなオブジェクトであるという件ではなく、むしろ次の件を帰結するものとして再解釈されるべきではあるまいか。すなわち、私たちが対象の存在知を持つことの不可能性は論証されない一方、私たちがそれを有していることの現実性もまたおそらくは論証されない、と。対象の存在知の不可能性も現実性も論証されないという私たちの知識の繊細な在り方、私たちは対象の存在知を有しているかもしれないし有していないかもしれないという件を照射するものとして、知覚および知識の対象は単に表象であるにすぎないという主張は捉え直されうるように思われる<sup>20</sup>。

問われるべき課題は残されている。とはいえ従来その現象主義的な見かけから忌避されてきた「第4 誤謬推理」の論述から、知識の懐疑論批判という論脈において擁護可能な議論を抜き出し、また超越論的観念論の解釈方針を仄示できたことを期待して、本稿を閉じたい。

---

20 この点は、「[...]カントは懐疑論的観念論を彼の批判的プロジェクトに特徴的な仕方でも維持している」([Oberst 2018, 173])とするオバーストの見解に接近していることだろう。

### 参考文献

- 『純粋理性批判』からの引用にあたっては、慣例に倣い、A版をA、B版をBとして、その後に頁数を本文中に付す。
- 『純粋理性批判』の翻訳の底本には、Philosophische Bibliothek版([Kant 1998])を用いた。
- 『プロレゴメナ』の参照にあたっては、アカデミー版カント全集([Kant 1911])により、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す。
- 外国語文献からの引用は、日本語訳のあるものについては適宜参照したが、基本的に引用者自身による訳文である。

5. 引用文中の傍点は、原文の隔字体に対応する。太字体の箇所は、原文でも太字である。丸括弧 ( ) は原著者によるものである。[ ] 内は引用者補いとし、中略は […] で表す。

- [Abela 2002] Abela, Paul. *Kant's Empirical Realism*, Clarendon Press, 2002.
- [Bird & Pettigrew 2019] Bird, Alexander and Pettigrew, Richard. "Internalism, Externalism, and the KK Principle," *Erkenntnis*, 2019, 1–20.
- [Caranti 2007] Caranti, Luigi. *Kant and the Scandal of Philosophy: The Kantian Critique of Cartesian Scepticism*, University of Toronto Press, 2007.
- [Chignell 2010] Chignell, Andrew. "Causal Refutation of Idealism," *The Philosophical Quarterly*, 60 (240), 2010, 487–507.
- [Fish 2010] Fish, William. *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*, Routledge, 2010.
- [Greco & Sosa 1999] Greco, John and Sosa, Ernest, editor. *The Blackwell Guide to Epistemology*, Wiley-Blackwell, 1999.
- [Guyer 1987] Guyer, Paul. *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge University Press, 1987.
- [Kant 1911] Kant, Immanuel. *Kant's gesammelte Schriften*, Hg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 4.
- [Kant 1998] Kant, Immanuel. *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner Verlag, 1998.
- [Kemp Smith 2003] Kemp Smith, Norman. *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason': with a New Introduction by Sebastian Gardner*, Palgrave Macmillan, 2003.
- [Lewis 1980] Lewis, David. "Veridical Hallucination and Prosthetic Vision," *Australasian Journal of Philosophy*, 58 (3), 1980, 239–249.
- [Marshall 2019] Marshall, Colin. "Kant's (Non-Question-Begging) Refutation of Cartesian Scepticism", *Kantian Review*, 24 (1), 2019, 77–101.
- [McKinsey 2018] McKinsey, Michael. "Skepticism and Content Externalism", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2018 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/sum2018/entries/skepticism-content-externalism/>>.
- [Nitzan 2012] Nitzan, Lior. "Externality, Reality, Objectivity, Actuality: Kant's Fourfold Response to Idealism," *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 94 (2), 147–177.
- [Oberst 2018] Oberst, Michael. "Kant, Epistemic Phenomenalism, and the Refutation of Idealism," *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 100 (2), 172–201.
- [Putnam 1981] Putnam, Hilary. *Reason, Truth and History*. Cambridge University Press, 1981.
- [Strawson 1966] Strawson, Peter F. *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, Routledge Taylor & Francis Group, 1966.
- [Strawson 2008a] Strawson, Peter F. *Freedom and Resentment and Other Essays*, Routledge, 2008.
- [Strawson 2008b] Strawson, Peter F. "Causation in Perception," in Strawson 2008a, 73–93.
- [Stroud 1984] Stroud, Barry. *The Significance of Philosophical Scepticism*, Oxford University Press, 1984.
- [Turbayne 1955] Turbayne, Colin M. "Kant's Refutation of Dogmatic Idealism," *Philosophical Quarterly*, 5 (20), 1955, 225–244.
- [Williams 1999] Williams, Michael. "Skepticism," in Greco & Sosa 1999, 33–69.
- [福地 forthcoming] 福地信哉. 「『純粹理性批判』第二版演繹論における量カテゴリーの客観的妥当性」, 『哲学の探求』, 47, 哲学若手研究者フォーラム, forthcoming.